シンポジウム「ロシア革命前における仏露関係」（2011年12月16日）

デカブリストとフランス

松村　岳志

要旨

ソ連の公認史学においては、デカブリストの革命性・当時の一般の人々との思想的な断絶が強調されてきたが、近年アレクサンドル一世時代の政治史の研究が進むにつれて、そのような解釈が事実に反することが示されつつある。

実際には、デカブリスト組織のメンバーが理想としたものは、当時の皇帝アレクサンドル１世自身、そして、その側近中の側近たるアラクチェーエフ伯爵の理想とするところとあまり変わらなかった。このことは、もちろん、デカブリスト叛乱が成功した暁に実現されるべき新しい社会についても言えた。

このデカブリスト運動に対するフランス思想の影響に関しては以下の三つの次元を区別すべきである。即ち、第一に、革命前からのフランス思想の影響、第二に、フランス人亡命聖職者による教育、第三にフランス王政復古期の自由主義思想である。

はじめに

本稿ではデカブリスト運動の参加者の一人であるミハイル・フョードロヴィッチ・オルロフ（Орлов, Михаил Фёдорович、1788-1842）に対するフランス思想の影響を論じる。以下、単にオルロフという場合にはこの人物をさす。オルロフを取り上げるのは、デカブリスト運動の「軍事革命」としての側面を最も明確に体現しているのが、彼だからである。

「軍事革命」（Военная революция）という言葉は、かつてソ連の歴史家タルレ（Тарле, Евгений Викторович、1874-1955）が提唱した、1820年にスペイン、ポルトガル、イタリアで生じたような、軍隊が主導する社会革命という意味である[(1)]。タルレはこの概念をそれ以上に深化させることはしなかった。しかし、20世紀に入ってからも、社会革命の試みのかなりのものが、例えば、1968年のペルー革命、1974年のエチオピア革命のように、軍主導で行われている。さらに、1927年の中国の南昌蜂起や、1936年の日本の2.26事件も、やはり軍主導の社会革命の試みであった。この種の革命を無視して近現代史を語ることは不可能であろう。

１．デカブリスト叛乱についての定説

さて、デカブリスト反乱とはなんであったのか。山川出版の『ロシア史』[(2)]によれば、ロシア皇帝アレクサンドル１世は「治世の前半には改革の意欲をもっていた」が、この改革の動きは

ナポレオン戦争により中断され、「戦後の『改革』はアレクサンドル初期のそれとは逆の方向を示して」いた。こうした中で「保守化に抗して決起したデカブリストの叛乱は、クーデターや一揆・農民戦争ではなく、ロシア史上最初の革命とよばれるべき事件であった。この運動の参加者は教養ある青年貴族であり、ほとんどが祖国戦争で勇戦奮闘した三十歳以下の将校であった。彼らの……目標は専制政治と農奴制の廃止であり、その運動の源泉は祖国愛であった」ということである。なお、前掲『ロシア史』は、デカブリスト運動が祖国戦争（ナポレオン戦争）と強い関係を持っていたとしている。そもそも「祖国戦争が民族意識を高揚させた」というのである。『ロシア史』はアメリカの研究者マズーアの言葉を引用し、「1815年以後、……『健全なナショナリズムの復興の兆候』があらわれてきた」といい、さらに、「未来のデカブリストたちは、1813～15年にナポレオンを追ってヨーロッパに転戦し、パリ占領にも加わった。ヨーロッパ諸国、とくにパリは彼らに衝撃的な印象をあたえた……彼らは祖国ロシアの政治的・社会的立ち遅れを痛感して帰国した。」、という。彼らは1816年２月にデカブリスト結社の最初のものを結成したが、「結社の目的や綱領は必ずしも明確ではなく……農奴の解放と立憲制の導入が目標と考えられていたようである」[(3)]。

その後「アラクチェーエフ体制の強行によって合法的な改良運動の機会は減り、またスペイン・イタリアなどの秘密結社の運動に刺激されて体制変革の可能性を追求する動きがでてきた。それはさらに、憲法を要求し、場合によっては革命行動をも是認する立憲君主派と、革命によって共和制を実現しようとする急進派に分かれ、……立憲君主派と急進派がそれぞれ中核になって、21年秋に『北方結社』、21年春に『南方結社』が結成された。南方結社の本部はキエフに近いトゥリチンにおかれ、ペステリが指導的役割を果たしていた。……彼の作成した憲法草案『ロシアの正義』……はジャコバンの影響を強く受け、農奴制の廃止と共和制の実現を主張していた。ペテルブルグを本拠とする北方結社でも、指導者ニキータ・ムラヴィヨフが憲法を考えていた。その内容はペステリのものに較べると穏健で、立憲君主制を主張し、農奴制は廃止するものの、改革にたいする貴族の支持を期待して、彼らにかなりの特権を認めていた。最高機関の選挙についても、ペステリが全市民に制限なく選挙権を与えるとしているのにたいして、財産による資格制限を付していた」[(4)]。

このような解釈は、私の考えでは、微妙な点で事実に反している。

実際には、デカブリスト結社のメンバーは、1817年、つまり民族の解放を目指す民主的な国政改革の意欲に燃えていた時期のアレクサンドル１世皇帝の暗殺すら計画しており[(5)]、さらに、軍上層部の少なくとも一部は、秘密結社の存在そのものは知らなかったものの、秘密結社のメンバーと非常に近い改革案をもち、時には秘密結社のメンバーと意見交換を行っていた[(6)]。つまり、アレクサンドル１世がまさに改革に夢中になっていたときに、しかも、まさにその改革が民主主義的であって、また民族解放をもたらすものだったがゆえに、その暗殺を計画したのがデカブリスト秘密結社なのである。そればかりか、彼らの理想の一部は、ロシア帝国陸軍首脳部、特にロシアにたった二つしかおかれていなかった「軍」の一方の参謀長（ペ・デ・キセリョフ少将）、そして数個おかれていた「独立軍団」の司令官のうちの少なくとも一名（ア・ペ・エ

ルモーロフ中将)、さらに近衛軍の多数の士官の共感を得ていたのである。要するに、デカブリスト運動は、大逆を企んでいたことは確かであるが、いつも必ず民主主義的であったわけではないし、いつも必ず民族の解放をもたらそうとするものでもなく、しかもその思想の一部は軍内で大きな支持を受けていたのである[7]。

2．研究史

デカブリストに関する一次資料は、各地の文書館が所蔵する書簡をはじめとして、大変な分量であり、公刊された資料集（例えば*Восстание декабристов. Документы.* Т.1-21. 1925-2008, М.-Л）も研究書も多い。以下では主要な研究だけをあげる。

デカブリストの歴史的研究の第一号は、叛乱鎮圧後にその調査を行った調査委員会の報告書である。これは公表されたが、その中ではデカブリストの綱領の一部が秘匿され、特に農奴解放、憲法制定、兵士勤務年限短縮などという、多くの人々の心をひきつけそうな部分は削られた。デカブリスト叛乱は単なる一握りの若手貴族たちの権力闘争だったことにされた[8]。

これに反論しようとしたのは、死刑にならなかったデカブリストたち、そしてデカブリストのシンパたちであった。デカブリストの残党としてはエム・エス・ルーニン、ニキータ・ムラヴィヨフ、シンパとしては詩人ア・エス・プーシキンがあげられる。彼らは、デカブリスト秘密結社が単なる不平貴族の陰謀団ではなく、代議制システムに基づく新しい体制を樹立しようとしていたことを力説した[9]。

1840年代以降、デカブリストの歴史的評価をめぐる議論は第二ラウンドにはいる。ここでデカブリスト側の闘士となったのは、ゲルツェンやオガリョフのような、いわゆる「革命的民主主義者」である[10]。これに対して政府側が持ち出したのはコルフ男爵の著書『皇帝ニコライ一世の即位』（М. А. Корф, *Восшествие на престол императора Николая I*, изд. 3, СПб., 1857.）[11] である。このコルフの研究は本格的な学問的研究と言うよりは、デカブリスト運動に対するニコライ一党の公式見解と言うべきもので、その内容は叛乱直後の調査委員会の報告書を踏襲するものであった。もっとも、ゲルツェンやオガリョフの議論のほうも、「かなり細かく運動の定義づけを行い、専制や農奴制に対する抗議の合法則性と不可避性とを示し」、デカブリスト叛乱が単なる宮廷クーデターといかに違っているかを説いた[12] が、これには革命運動の継続ないし発展のためのアジテーションに、デカブリストの記憶を利用しているという側面もあり、学問的な歴史研究と言えるものではない。

デカブリストに関する本格的な歴史研究は19世紀後半以降に始まる。その先駆けは、ア・エヌ・プィピンの研究である（А. Н. Пыпин, *Общественное движение в России при Александре I*, изд. 2-е, СПб., 1885.）。この本は、デカブリストの思想の革命的性格を否定すると同時に、アレクサンドル１世皇帝の治世という文脈の中でデカブリスト叛乱を捉えようとするものである。これは珍しいほどに健全なことであった。というのは、ソ連時代になると、特にネチキナの影響のもとにおいて、デカブリスト叛乱はそのほかのさまざまな社会的状況から切り離されたからである。なお、プィピンの研究は初めてデカブリストのメモワールを利用したという点でも画期的であった[13]。

さらに20世紀はじめにはヴェ・イ・セメフスキーがデカブリストに関する研究（В. И. Семевский, *Политические и общественные идеи декабристов*, СПб., 1909.）を発表した。これは今日においても強い影響力を有している。この研究もまた、プィピンのものに似て、デカブリストの思想的穏健性を強調するものであった[14]。

以上のように、プィピンにおいても、セメフスキーにおいても、デカブリストの綱領とアレクサンドル１世の改革プランとの関連性、ないし連続性が強調されていることは、ソ連時代に支配的となったネチキナの学説との大きな違いとして記憶すべきことであろう。

ロシア革命後、1930年代の途中までデカブリストをめぐる学説の中で主流となったのは、エム・エヌ・ポクロフスキーの解釈であった。ポクロフスキーはデカブリスト叛乱について、貴族の狭い階級的利害に根ざした、専制政治を制限しようとする試みであると論じていた[15]。この点はやはり革命前の研究との連続性が認められる。

1936年ごろを転機に、ポクロフスキーの解釈は批判され、新しい解釈が一般的になる。これは、デカブリスト反乱をロシア革命の先駆として捕らえようとする解釈である。この新しい解釈はレーニンによるデカブリスト評価に依拠している。レーニンはロシアの革命家に三つの世代があると述べた。第一の世代は貴族革命家の世代で、デカブリストとゲルツェンとがこれに属する。第二の世代はチェルヌイシェフスキーから「人民の意志」党にいたるまでの雑階級身分の革命家である。そして第三の世代が人民による革命である[16]。

ソ連において主流であったこの学説の中心人物はネチキナであった。ネチキナがポクロフスキーとは打って変わって、デカブリストを高く評価するのは、彼らが革命を起こしたからである。

ネチキナの見解は次のように整理できる。彼女はデカブリストをロシア革命運動の先駆者としてみようとする。そこで問題になるのは、各時代の革命運動の到達点である。第一の世代の貴族革命家たちは、せっかく革命をやろうとしたが、「信じられないほど民衆から遠かった」。第二世代のチェルヌイシェフスキーや「人民の意思」党の革命家たちは人民との結びつきを強めたが、本当の嵐を巻き起こすことはできなかった。そして、第三世代ともなると、徹頭徹尾革命的な唯一の階級、すなわちプロレタリアートが大衆そのもの先頭に立ち、はじめて、数百万の農民の公然たる革命闘争を導いた[17]、というわけである。かくして、デカブリスト叛乱は1917年のロシア十月革命をゴールとする歴史的過程の一発展段階だということになる。

仮に、プロレタリア革命なるものが歴史の必然であるならば、おそらくこのような見方は正しいのだろう。しかし、ソ連崩壊によって、「歴史の必然としてのプロレタリア革命」という見方が正当性を失った以上、デカブリスト叛乱を、ロシア革命を到達点とする発展過程の一段階としてとらえる見方も、もはや維持不能である。さらに、このような見解の問題点は、タテの連続性に重点を置くあまり、ヨコの連続性、具体的には、デカブリスト叛乱の中と外との関係が無視していることである。

さて、ネチキナのこの議論はソ連史学では公認学説となり、正面からネチキナの学説を批判する研究は、ソ連崩壊後も、筆者の知るかぎり極めて少ない。しかし、ソ連史学によって公認され

たネチキナの学説のうちの全てが今日まで命脈を保っているわけではない。公認学説になっていたネチキナのもう一つの学説、つまり、1861年の農奴解放が当時のいわゆる「革命的状況」、つまり、政府に対する民衆の不満の高まりに対する譲歩として行われたのだという学説はいまや全く過去のものとなってしまっている[18]。したがって、ネチキナのデカブリストにかかわる学説がこうも長期にわたって認められているのには、それなりの理由があるものと思われる。

その理由と考えられるものの一つは、このネチキナの学説がデカブリスト叛乱当時から、今日に至るまでのロシアの知識人社会の一般的通念と合致していることである。そのような社会通念としては、例えば、アレクサンドル1世の寵臣であったアラクチェーエフ伯爵が、「反動的で、後ろ向きで、残酷な」[19] 人物であったとか、このアラクチェーエフがアレクサンドル１世の治世後半の反動的な方向性を主導した[20] というものがある。

しかし、このような社会通念は、実際には現実から乖離している。

アレクチェーエフは確かに貴族に対して粗暴であったが、それは彼が、家柄の点では自分よりもはるかに格上の貴族に対して、当時必要だと考えられていた礼儀を示さなかったというだけのことである。これはアラクチェーエフが人間の価値は家柄よりも、アレクサンドル１世という君主に対する距離で推し量られるべきであるという考えを持っていたからである[21]。アラクチェーエフにとっては、地球で一番大事なのは、(ロシア帝国よりも！)、アレクサンドル１世という個人なのである[22]。

したがって、アラクチェーエフはアレクサンドル１世皇帝の言うことには何でもかんでも賛成なのであって、皇帝が改革を進めればアラクチェーエフも改革を進めるし、皇帝が改革をやめれば彼も改革をやめるのである。つまり、改革に対するアラクチェーエフの態度はニュートラルなものであって、アラクチェーエフが改革を実行するよう、あるいは停止するよう皇帝に勧めるなどということは考えられない[23]。現にアラクチェーエフが作った農奴解放案も存在している[24]。彼は確かに独占欲が強かったが、それはアレクサンドル１世の信頼に対する独占欲であって[25]、国政を壟断したいなどとは考えていなかったように思われる[26]。だからこそ、アレクサンドル1世が死ぬと、アラクチェーエフも引退するのである[27]。しかも彼は、必要とあれば、かつて自分を侮辱したエルモーロフを[28] 大抜擢して、陸軍大臣の座に据えようとする[29] ほどの度量すら持っていた。

デカブリスト運動の分析においても、伝統的な学説には問題がある。それは、何をもってデカブリストの思想の代表とみなすべきか、という問題である。すでにネチキナにおいても、デカブリストの思想に「少なからぬ内部矛盾」が存在していたことが認められている。しかし、ネチキナの「デカブリスト運動が10年間にわたって発展し、その発展の過程において著しく成熟した」[30] という言葉は、事実ではあるまい。確かにデカブリストの中には、例えば、立憲君主主義者から共和主義者へと転化したものもいる。だが同じ時期にエヌ・エム・ムラヴィヨフのように、共和主義者から立憲君主主義者へと転化したものもいる[31]。ここに見られるのは、1970年代ブントの「思想的雑炊性」に似た、一貫性の欠如である。そうだとすれば、なぜデカブリスト運動の最終局面が、運動全体の到達点を示すものであるとみなされなくてはならないのだろうか。

より具体的に、ロシア帝国のオーストリア国境、トルコ国境に展開していた第２軍内のデカブリスト集団、いわゆる南方結社について言えば、ペステリの憲法案がデカブリストの思想の完成形態を示すものであると考えられているようである。しかし、果たしてこのような解釈は正しいのだろうか。

デカブリスト秘密結社が誕生したのは1816年２月であり、壊滅したのは1825年12月である。この10年ばかりの存続期間のうち、1817年９月から1822年２月までの５年近くにわたって、第２軍内部の陰謀家たちの中で最高の地位（陸軍少将）にあり、また1820年７月から22年２月までの１年半の間に限っては最大の兵力を直接掌握していたのはミハイル・フョードロヴィッチ・オルロフである[32]。ペステリ大佐も1821年11月には第２軍長ヴィトゲンシュタイン大将の副官から転出してヴャトカ連隊連隊長になっており、同じくデカブリストのアブラモフは1823年末に、ブルツォフは1824年春にそれぞれ副官から連隊長に転出している[33]が、大佐でしかない彼らの指揮権が及んだのはそれぞれ一個連隊約2000人にすぎなかった。師団長時代のオルロフの思想についてははっきりした証拠はない。オルロフが参加していた「ロシア騎士団」のプログラムが志向していたのが共和制なのか、それとも君主制だったのかもはっきりしないが、少なくとも1814－1815年の複数のプログラムには寡頭制の色彩が強く、どちらの場合も上院議員の一部は世襲制であった[34]。また、1820年２月28日付けのオルロフからペ・ア・ヴャーゼムスキーへの手紙には「誰にほれ込んでいるかって？一番気高い思想、つまり代議政体にほれ込んでいるのさ。僕は今、バンジャマン・コンスタン、ベンタムみたいな著述家と生きているのだよ」と書かれている[35]。コンスタンは一般に「自由主義」と評される思想家であるが、彼はルソーとは異なって、直接民主制ではなく代議制に依拠し、たとえ人民のものであれ権力を無制限のものではなく有限のものと捉え、権力に対する法の優越を説いていた[36]。この点で、オルロフの構想は山岳派独裁の影響を強く受けたペステリの「ルスカヤ・プラウダ」と比べて、はるかに貴族主義的なものであった。

かように、デカブリスト運動が、全体として方向性の定まらないものだった上に、貴族主義的なオルロフが、第２軍内部のデカブリスト集団内で最大の軍事力を持っていた期間が決して短くはないことを考慮すると、デカブリスト南方結社の主張を、ペステリの主張で代弁させることには問題がある。

以上のように、19世紀以来のステレオタイプな社会通念は、しばしば現実と乖離しているのであるが、このような社会通念を綜合すると、この時代をアラクチェーエフとデカブリストとの対立に終始するものとして捉える[37]とか、1817年末から1818年初めにかけてのデカブリストによる皇帝暗殺計画の目的を、民主的改革の実施であるとみなす[38]などといった、あきらかに事実に反する認識を得ることになってしまう。

ネチキナの見解が長期にわたって影響力を保っていたのは、上記のような個別的な事実の解明がやっと最近になって行われるまで、長く命脈を保ってきた革命以前のステレオタイプの見方にうまく合致したからであろう。

したがって、デカブリストに関する学説が改められるのは、このようなステレオタイプが書き

換えられたときに他ならないことになるが、そのためには地道な実証的研究が必要になる。

実際、1960年代以降、1810－20年代のロシアについての実証的研究が進むと、少しずつネチキナの図式からはみ出た研究が現れた。その中でも、もっとも重要なものはランダ[39]、ミロネンコ[40]、ロートマン[41]、ダヴィドフ[42]の研究であろう。これらの研究は、大枠としてはネチキナの公式的見解を認め、あるいは少なくとも、認めたようにみせかけている一方で、デカブリストの思想や行動そのもの、あるいはその周辺の事象にについて、数多くの小さな事実を発見している。それらの積み重ねの結果、デカブリストについての伝統的な、ロシア革命以前から知られていた解釈が大きく変わるに至った。

その第一は、貴族主義的反対派[43]とデカブリストとの思想的連関の再強調である。デカブリストは革新的な思想の持ち主だと考えられているが、専制政治に批判的な、保守的な貴族たち、自分たちの身分的利害を重視していた貴族主義的反対派の正当な後継者とも呼びうるのである。このような見方はポクロフスキーにおいては当たり前だったが、レーニンの革命家三世代論に依拠したネチキナの見解はこの側面を目立たないものにしてしまっていた。

この連関は重要である。ナポレオン没落直後のヨーロッパにあっては、無制限の人民主権という思想は山岳派のテロルによって信頼を失っていた。このようなテロルを回避するための、有効な方法の一つは、イギリスに習うことだと考えられた。それは強力な王権、二院制、貴族制度といったものを認めることに他ならなかった[44]。このため、ナポレオン戦争直後にロシアの国政改革をめざしたデカブリストは、貴族主義的反対派と意見を共有することになったのである。

第二は、デカブリスト反乱の参加者とそうでない人たちとの間で、理想や改革プランにあまり違いがないことが認められてきたことである。これは断片的な事実の積み重ねの結果得られた結論であるが、そのような事実の中には次のようなものがある。

まず、アラクチェーエフは各種の改革に反対であるどころか、むしろ、農奴解放や兵役年限短縮に関しては推進派であった[45]。さらに、アラクチェーエフが体罰制限論まで展開していることは注目してよいだろう。「兵士を教練中に処罰することは避けなければならない。なぜなら教練中のあやまりは主に理解力によるものであって、理解力は人によって異なるからである。したがって、新兵を望ましい完成度にまで導くには、時間と熱意とを費やさねばならない。殴打ではなく分別ある説明とやさしさによってのみこの目的を達成しうるのである」[46]。これがあの「鉄の伯爵」の体罰論である。

陸軍の首脳部でも、体罰廃止、農奴解放、憲法制定、兵役年限短縮を望む声は極めて強く、そのような思想の持ち主としては、プロイセン国境に展開していた第１軍内部当直将官のザクレフスキー少将、第２軍参謀長キセリョフ少将、第２軍隷下の第６歩兵軍団長サバネーエフ中将、カフカス独立軍団長エルモーロフ中将があった。

さらにまた、デカブリストをはじめとするロシアの青年貴族が、ナポレオン戦争でフランスに行って、そこではじめて自由思想に触れたなどということは絶対にありえない。というのは18世紀末のロシアの進歩的な貴族の間ではヴォルテールやルソーは普通に読まれていた[47]からである。

以上を綜合するとデカブリストと非デカブリストとの間にはそれほど大きな差がかったことになる。実際、現在のロシアでは、デカブリスト運動を歴史のタテの線で捉えるのではなく、デカブリスト運動と外国の思想との影響、あるいは、デカブリスト結社とそのほかの秘密結社との対比[48]のように、ヨコのつながりで捉える研究が増えてきている。

なお、ロシア以外の研究でよく知られているのはアメリカ合衆国のマズーアの1936年初版の本である[49]。この研究は、ネチキナ同様にデカブリスト反乱を1917年のロシア革命のさきがけと捉えており、ソ連でもある程度評価されていた[50]。マズーアのデカブリスト評価は驚くほどネチキナに近いが、これは両者とも革命前のステレオタイプな歴史解釈に依拠している以上当然である。どちらにとっても、デカブリストは進歩的でアラクチェーエフは反動的なのである。

日本でのデカブリスト研究は少ない。それでも外川継男、池庄司敬信、西田幸子、藤本和貴夫、河原祐馬、秋元春朝らの業績がある[51]。

3．オルロフという人物

ミハイル・フョードロヴィッチ・オルロフは1762年のエカチェリーナ２世のクーデターで功績をたてたオルロフ兄弟の一人、フョードル・グリゴリエヴィッチ・オルロフの非嫡出子である[52]。

ミハイルは「暴君殺し」の血統に育った。というのは、父と伯父たちが1762年のピョートル三世打倒で重要な役割を果たしており、いとこの夫のエヌ・ペ・パーニンは1801年のパーヴェル一世暗殺の首謀者だからである。当時の教養あるロシア貴族の社会通念によれば、ロシア貴族は「市民」であり[53]、ピョートル三世やパーヴェル一世は、市民社会の秩序を紊乱する「暴君」であった。そして当時の古典教育では、当然、王政ローマ末期の貴族ブルトゥスらによるタルクィニウス家出身の王の追放、そして、このブルトゥスの同名の子孫によるカエサル暗殺が教えられていた[54]。となれば、オルロフが暴君を打倒して市民社会を守ることを己の使命として意識しても不思議ではない。

オルロフは1805年、イエズス会系の寄宿制学校を卒業すると、すぐ陸軍に入隊した[55]。時あたかもフランス革命戦争、ナポレオン戦争の時代にあたっていたが、オルロフはこの戦争でいくつかの尋常ならざる武功を上げる。

その第一は、この戦争の長期的な戦略にかかわる。1812年６月の露仏開戦直前に、ナポレオンはロシア国境沿いに大規模な兵力を集中させた。この動きの説明を求めて、将軍バラショフが軍使としてフランス軍陣中に赴いた。このときバラショフに随行したのが若き日のオルロフ中尉であり、彼は、上官が仏軍ダヴー元帥と会談している間に、フランス軍中を調査し、馬糧不足という重大な事実を確認する[56]。このあと、ロシア軍は、焦土作戦に出るが、この戦略の採用には、オルロフの報告も多少は貢献しているものと思われる。

第二の武功は、ロシア国境を越えたナポレオン軍が、モスクワ目指して進発してからのことである。オルロフはボロジノ戦の直前に、ドロホフ中将の支隊の参謀長に任命された。この部隊は戦闘後には後衛部隊となり、ロシア軍主力の撤退を援護した。フランス軍がモスクワを占領すると、オルロフはデニス・ダヴィドフらとともに、ナポレオン軍の補給路の破壊に活躍した[57]。

第三の武功はナポレオン軍の公報を分析し、その中から彼らの窮状が読み取れることを公表したことである。1813年はじめにオルロフが入手したフランス軍の公報第29号は、フランス軍がロシアで敗北したことを認めてはいた。ただし、この公報の中では仏軍の敗因は冬ということになっていた。オルロフはこの公報を分析し、『公報第29号についてのロシア軍の考察』と称するパンフレットを執筆し、その中で、フランス軍が寒波ではなくて、ロシア正規軍やパルチザン部隊に敗北したことを説得的に述べた。これはロシア側の士気高揚に大いに役立ったであろう[58]。

第四の武功は、1814年３月31日にパリ開城の文書に署名したことである。この時には、職業外交官のネッセリローデとオルロフとが、仏軍マルモン元帥の下に赴いて交渉を行ったが、条件が折り合わず、ネッセリローデは新たな指示を仰ぐべく、反仏連合軍司令部に戻った。しかし、オルロフはすぐにフランス軍を降伏させてしまわないと、戦争がさらに長引くことを見て取って、その場でねばり強く交渉を続け、午前２時までかかってパリ降伏条約調印を実現した[59]。

以上のように、彼は1812年の戦争において、恐れを知らぬ偵察将校、パルチザン戦の勇敢な軍人、優れたアジテーター、そして有能な交渉人という四つの側面で才能を示した。かくして彼は、彼は30歳前に少将になるという異常な昇進を遂げた。

ナポレオン戦争後の1814年、オルロフは「ロシア騎士団」なる秘密結社の組織に着手する。この秘密結社は、ナポレオン戦争後にヨーロッパ各国で流行した半ばフリーメーソン的な秘密結社の一種であった。初期の参加者としてはオルロフのほか、ドミトリエフ＝マモノフとパルチザン詩人として高名なデニス・ダヴィドフの名前を挙げることができる[60]。さらに、のちに『ロシヤ及びロシヤ人』[61]を執筆することになるエヌ・イ・トゥルゲネフ、また、軽妙洒脱な文才の持ち主[62]で、のちのクリミア戦争においてはセヴァストポリ要塞陥落の責任を負うことになるア・エス・メンシコフもまた「ロシア騎士団」のメンバーであった[63]。この「ロシア騎士団」は独自の憲法案をもっていたが、それによれば将来、専制政治は打倒され、代わって身分制的な議会が国政の最高機関となることになっていた[64]。この間、1815年にはオルロフはフランスを占領する対仏連合軍のうちのロシア軍の参謀長に任ぜられ、フランスに赴いたが、1816年秋にはロシア本国に召還された。新たな任務は示されず、彼は10ヶ月も待命ということになった[65]。

帰国したオルロフが目の当たりにしたのは、友人たちの何人かが参加していた「救済同盟」であった。これこそがデカブリスト結社の最初のものである。1816年から1818年までの間には「ロシア騎士団」のメンバーの多くが、同時に「救済同盟」にも加盟するようになった。このため、「ロシア騎士団」は有名無実化してしまう[66]。

1817年に「救済同盟」は解散し、翌1818年には「福祉同盟」が作られるが、この間、1817年８月に、オルロフは歩兵軍団参謀長として第２軍に転属することになった。これは一種の左遷である[67]。

この時期の「福祉同盟」は農奴解放、憲法制定などの目的達成のために、20年ほどかけて世論を形成することを構想していたが、オルロフはこれがあまりにも長すぎると考えた。彼は、自ら兵士を率いて武力で革命を実施することを夢想した。さらに、オルロフを勇気付ける事件が生じた。1820年のスペインにおけるリエゴ中佐の軍事クーデターである[68]。この軍事革命は、

ナポレオン軍の侵攻を退けつつあったスペインで1812年に制定された憲法が、戦後スペイン王フェルディナンド７世によって否定されたことに抗議して、憲法復活のために行われたものであった。

このころからオルロフは、部隊の指揮権を直接握ることを求めるようになる[69]。これは、リエゴ同様に実戦部隊の指揮権を握っておれば、軍事クーデターの実施が可能であるという理由からであろう。彼の親友で、第２軍参謀長として第２軍内部の人事に強い発言権を有していたペ・デ・キセリョフ少将は、オルロフの求めに応じて影響力を行使し[70]、1820年７月にはオルロフはベッサラビアに展開する第16歩兵師団長に親補された[71]。第16師団は３個歩兵旅団と１個砲兵旅団からなっていた。さらに歩兵旅団のそれぞれは歩兵２個連隊からなっており、歩兵１個連隊の定数は2000名以上[72]なので、定数どおりだとすれば、オルロフの指揮下には歩兵６個歩兵連隊、少なくとも１万２千人の兵力が集まっていたことになる。

当初オルロフの着任は、第２軍長の歩兵大将ヴィトゲンシュタインによって、脱走を大幅に削減させることになるだろうと歓迎された[73]。18－19世紀のヨーロッパのどこの国でも下士官兵の脱走は問題であった。当時のロシア軍においても、兵役年限を勤め上げて退役する下士官兵よりは、脱走により軍から消える下士官兵のほうがずっと多かった。例えば、第16歩兵師団が所属している第６歩兵軍団（軍団長イ・ヴェ・サバネーエフ中将）の下士官兵の定数は43,106人であったが、1816年から1821年までの５年間で、「不具者」として退役したものは4115名で、そのうち兵役年限を勤め上げたものは53人にすぎず、この同じ時期に3600人が死亡し、ほぼ同じ数が脱走していた。つまり、５年間に、全兵力の10％が「不具者」として退役し、別の10％が死亡し、第三の10％は脱走しているのである[74]。

オルロフは着任するや、手始めに下士官兵の脱走をふせぐためと称して、師団内での体罰の制限を命じた。このこと自体は、すでに見たようにありふれたことである。しかし、オルロフは軍の指揮系統を無視して、中隊長以上の各級指揮官が体罰を行っていないかどうかを、兵から直接師団長たる自分に報告するよう命じ、さらに、指揮官を監視するよう下士官兵に命じた命令書を中隊長等の指揮官自身に部下の前で読むよう命じた[75]。これは明らかに軍の規律を破壊する行為である。

オルロフのこのような態度を疑問視した士官たちがオルロフの直属の上官である第6歩兵軍団長サバネーエフ中将に直接訴えでたため、サバネーエフはオルロフを詰問し、オルロフ、サバネーエフの両者と親交のあるキセリョフはその調停に苦しむことになる[76]。

オルロフがクーデター工作に没頭している間に、福祉同盟内部では第２軍内のペステリを中心とするグループとこれに反対するグループとの対立が激しくなり、とうとうこの対立を解消するため、1821年１月にはモスクワで会議が開かれた[77]。

ところが、この会議の席上、オルロフは突如として極めて過激な提案を行い、それによって仲間たちから孤立することになる。オルロフの提案は、檄文印刷のための地下出版所の設立、資金獲得のための貨幣偽造、指揮下の兵力を用いての政府の打倒といったとんでもないもので、これを聞いた会議の列席者はみな唖然としてしまった。イ・デ・ヤクーシキンなどは、「あんた、ふ

ざけとるんか」と反問した。オルロフは賛同を得られないと見るや、もはや秘密結社など脱退すると言い放ち、そのまま会議を途中退席してしまった[78]。

オルロフのこのような行動の理由として考えられるのは、オルロフの師団ぐるみの叛乱準備がうまくいきすぎ、同時に、外部にも徐々に情報が漏れ出していたため、早急に叛乱を起こさないならば、組織そのものが摘発される可能性が極めて高かったということである。だからオルロフとしては今すぐ、指揮下の軍隊を用いての叛乱を起こすか、でなければもはや叛乱など永久に試みないかのどちらかの手段しか選ぶことができず、その場合に秘密結社の師団外のメンバーが同調するかどうかを確認したかったのであろう[79]。

なお、福祉同盟の会議はオルロフ退場後も続けられたが、ペステリを中心とする一派とこれに反対するグループとの距離は縮まらず、ついに結社は分列し、いわゆる南方結社と北方結社とが誕生することになる[80]。ただし、オルロフの行動はまた別である。

1821年３月、オルロフは任地のキシニョフに戻った。彼の下では三人の歩兵旅団長のうちの少なくとも一人（ペ・エス・プーシチン少将）、六人の歩兵連隊長のうちの少なくとも一人（第32狙撃兵連隊長のア・ゲ・ネペニン大佐）が秘密結社のメンバーとして、活動を続けていた。この師団では上官が部下に対して暴力を振るうことは厳格に禁止され、違反者はしばしば指揮官職を解任された。しかしながら、兵士に対するこのような穏健な態度は「父なる」師団長オルロフ個人の慈愛として解釈されていた。これによって、第16師団の下士官兵はオルロフという個人の「私兵」に転化しつつあった。兵士たちは平気で上官を批判するようになった。このような軍律弛緩は同じく体罰反対派でも、軍内部の規律に極めて厳格な第６歩兵軍団長サバネーエフ中将の容認するところではなく、サバネーエフは第16師団内にスパイ組織を設け、オルロフの行動を監視させた[81]。

1822年１月、オルロフが休暇でキエフに赴いた隙をついて、サバネーエフは第16師団において抜き打ち視察を実施した。ところが、この時誰も予測していなかったことが生じた。遅くとも1819年から秘密結社のメンバーであった第32狙撃兵連隊付きのユミン少佐が、サバネーエフに、第16師団の士官たちの間で秘密結社が活動していることを報告したのである。サバネーエフは、もともとの目的であるオルロフ失脚を狙って、オルロフが師団内部に設けた兵士の学校の責任者であるラエフスキー少佐への尋問と家宅捜索を命じた。これによって第16師団内で、反政府的な宣伝活動が行われていたことがあきらかになり、ラエフスキーも逮捕された。これに驚愕した第２軍長ヴィトゲンシュタイン大将は直ちに皇帝に報告を行った[82]。

国政の急進的な改革を、むしろ望んでいたサバネーエフは、これ以降、秘密結社の存在を無視して、問題を単なる規律弛緩事件として片付けようとする。サバネーエフがオルロフによる師団の私兵化、そして挙兵計画を見抜いていたことは明らかで、1822年4月28日づけのサバネーエフからオルロフへの私信はそのことをはっきり示している[83]。

1822年２月にはオルロフは師団長職から遠ざけられ、第16師団内部の秘密結社のメンバーの多くは軍隊から追い出され、かくして第16師団長の陰謀計画は潰えた[84]。1825年のデカブリスト叛乱のあと、ラエフスキーやオルロフをめぐる事件の全貌はようやく明らかになる。以上がオ

ルロフをめぐる事件の経緯である。

4．デカブリストへのフランスの影響

近年、『デカブリストとフランス』という本を出したパルサモフは、デカブリストに対するフランスの影響は、ほかのどの国の影響よりも大きいという[85]。

以下ではデカブリストへのフランスの影響のいくつかの次元を見ていきたい。

まず、デカブリストは自分をフランス人の一種だと考えていたようなところがある。ロシア貴族は小さいころからフランス語を話し、フランス人の間で育ったのだから当然である。ことに、多くのデカブリストが幼年時代にフランス革命から逃れてきたフランスの亡命貴族たちの間で育ったことも無視できない。こうして一部のデカブリストはフランス王党派に非常に強いシンパシーをもって育った。彼らはルソー、モンテスキュー、ヴォルテールなどにもちろん触れてはいたが、それだけではなくて、ジャコバン独裁やナポレオン独裁の問題点もよく理解していたのである。

デカブリストにとって革命政府もナポレオンも、実際に銃火を交えた敵であった。しかも、それは戦争だから仕方なく銃火を交えたというのではなかった。デカブリストは、ナポレオンという悪からヨーロッパを解放するという使命に燃えて、自分の部下の農民出身の兵士たちを煽り、戦死させつつ、フランス軍と銃火を交えたのである。

さらに、1820年代を生きたデカブリストにとって1793年の憲法は30年も昔のものであった。そのあとに、総裁政府の時代があり、ナポレオン時代があり、デカブリストにとっての現在とは、すでに「憲章」即ち、フランスの欽定憲法が認められた王政復古時代であった。この時代は、ルソー的な人民絶対主権論に対して、強い批判が見られた時代である。

したがって、ペステリのルスカヤ・プラウダがルソーに近いこと[86]は、実に奇妙なことである。もし、ペステリ本人がロベスピエールのロシア版になりたかったとか、ナポレオンのロシア版を目指していたということであれば、ルソーの思想に強く影響を受けたような国家体制を目指すのは非常によくわかるが、もし、そうでないとするならば、ペステリがルソーの影響を強く受けていたというのが間違いなのか、でなければ、ペステリがよほど異常な人間だったか、ということになるだろう[87]。

以上がデカブリストに対するフランスの影響の最も基本的な次元である。

次に、フランス革命を逃れた多くのフランスの宗教系教育者、特にイエズス会士がロシアに学校を作り、これがフランス啓蒙思想をロシア人の間で広めたということがある。大革命から逃げてきたカトリックの聖職者たちが、ロシアで学校を作ることは歓迎された。しかし、ロシアではカトリック教の布教など許されるはずがなかった。かといって、カトリックの司祭たちは、自分たちの学校に正教の司祭たちを受け入れることも好まなかった。このため、彼らがロシアで作った学校の教育は世俗的なものになってしまったのである。イエズス会のこうした学校で学んだデカブリストは極めて多かった[88]。

三番目にくるものが、フランス王政復古後の思想の影響である。ナポレオン没落後のヨーロッ

パでは、ルソーの思想がもてはやされていたわけではなかった。当時ナポレオンの支配は「専制」とみなされていたが、同様にロベスピエールをはじめとする山岳派の支配も「多数による専制」とみなされていたのである。この時代に新しい政治体制として期待されたのはいわゆる「自由主義」であるが、この思想は決して自由を特に重視したものではない。むしろそれは人権思想とでも言うべきものである。その代表者はフランスの思想家バンジャマン・コンスタンであり、彼はナポレオンの百日天下にあたって憲法制定のために働いたほか、ロシア皇帝アレクサンドル１世を自分の理想の君主と思い込み、謁見を願い出ている[89]。

コンスタンの「自由主義」は次のようなものである。

ギリシアやローマの古典的な共和国においては、自由とは民衆が国家統治に直接参加することだと考えられており、こうした古典的共和国は市民の完全なる没我を要求していた。しかし、文明の発展と共に人間は国家からの自由を求めるようになった。そこで出てくるのが代議制である。コンスタンは言う。「国家主権は制限された相対的な形でしか存在するべきではない。個人の独立が始まるところで、法的な主権は終る。もし社会が、この境界線を越えるならば、その社会は鞭による法律しかもたない専制君主と同じくらい悪い。ルソーにはこのことがわかっていなかった」[90]。

この「自由主義」がまともに機能していた国家はイギリスであった。そこでは議会の存在により、君主の権力は制限されていたが、二院制の存在ゆえに衆愚政治も回避される。

この時代のデカブリストは、幼少期からルソーのような啓蒙思想家の著作に親しみ、そして山岳派独裁とナポレオン専制のあとになってスタール夫人やコンスタンの「自由主義」的な著作を読んだのである[91]。

したがって、仮にデカブリストがフランスに侵攻して、その先進的な社会を見て、それをロシアにも移植したいと思ったとしても、フランス革命の成果をそのままロシアに移植しようとしたのではない。特に、ジャコバン独裁をそのままロシアに移植しようとしたなどということはありえない。唯一ペステリにはそのような傾向が見られるが、まさにそのことゆえに、ペステリをもってデカブリストの代表というわけには行かないのである。

５．オルロフとフランス

さて、オルロフとフランスとの関係については、最近パルサモフが『デカブリストとフランス』の中でまるまる一章を割いて論じており[92]、その中で特に取り上げられているのは、サルジニア王国公使としてロシアに滞在していたジョゼフ・ド・メストルとオルロフとの関係である。

この二人の関係は1814年にド・メストルがその著書『フランスについての考察』をオルロフに贈呈し、オルロフがこれに対して感謝の手紙を送ったことで知られている。二人の共通点はイエズス会系の学校の出身であることだった[93]。

イエズス会は1773年に教皇クレメンス14世によってヨーロッパでの活動を禁止されたが、この時、ロシア皇帝エカチェリーナ２世はロシア帝国西方諸県でイエズス会の活動を許可した[94]。

西方諸県とはポーランド分割でロシア領となった地域で、ロシア本土では支配的な宗教は正教だったのに対し、この地域で支配的な宗教はカトリックであった。

さらに、フランス革命で宣誓忌避僧が大量にロシアに逃れてきたときに、ロシア国内ではイエズス会系の学校が続々と作られるが、1794年にペテルブルグで設立された修道院長ニコルの学校はその最初のものの一つであり、オルロフはそこの卒業生であった[(95)]。

そこでの教育が宗教色を排除した世俗的なものだったことはすでに述べたが、教師と生徒との宗教的・民族的相違のために、ここでは「国民的なものを超えた」「貴族主義的なもの」が教えられた[(96)]。このこともまたオルロフの貴族主義を育てる要因になったことだろう。

『フランスについての考察』は、フランス革命を、啓蒙思想に代表される人間の傲慢さに対して神が下した罰だとみなしていた。さらにド・メストルは王政復古が必ず行われるであろうこと、そして、憲法が必要であること、意志強固で創意工夫に満ちた個人が真の立法者になることを述べている[(97)]。ド・メストルは「神秘思想家」と呼ばれるが、それにしてもこの神秘思想は啓蒙思想を咀嚼吸収した上で展開されており、しかも、バンジャマン・コンスタンらの思想とある程度一致し、革命思想とも両立できるものである。

この書物がオルロフに強い影響を与えたのは、これが書かれたのが1796年、オルロフがこれを読んだのが1814年であって、いずれにせよブルボン家の復古など考えられもしなかった時代であるのにもかかわらず、ド・メストルのこの予言が的中したからである[(98)]。

1814年現在、極めてオルロフに近かったアレクサンドル１世が神秘主義的な気分にとらわれていたこともオルロフにこのような気分を受け入れやすくした[(99)]。

しかしながら、1815年にアレクサンドル１世との不和が明らかになると、オルロフはまさに自分こそが神慮に基づいて、祖国を救うべき人物であると思い込み始めた[(100)]。

そのあと、1822年のオルロフの陰謀の発覚までの間に、彼の思想がどのように変化したのかはよくわからない。しかし、彼が1820年になっても代議制を支持し、バンジャマン・コンスタンを好んでいたのは確かである[(101)]。デカブリスト南方結社最大の軍閥であるミハイル・フョードロヴィッチ・オルロフは、1820－1822年に隷下の第16師団を率いて軍事クーデターを実行しようとしていたときでも、ルソーが唱え、ペステリが追従したような人民絶対主権説ではなく、イギリス流の自由主義を追及していたのである。

少括

デカブリスト叛乱についてのネチキナの説は、デカブリストの思想が、当時の貴族社会の一般的な思想といかに隔たっていたかを力説するものであった。その中では、19世紀のステレオタイプな概念が効果的に利用され、それゆえ、19世紀ロシアの著作に親しんだ人々にとって、ネチキナの学説は全く当たり前のものに思われた。

しかし、20世紀後半以降、ということはネチキナの著作が現れたのとほぼ同時代に、19世紀ロシアの政治史にかかわる一見些細な事実が一つずつ発見されていくにつれて、19世紀以来のステレオタイプの虚妄性が明らかになり、これによってネチキナの説も成り立たなくなった。

実際には、デカブリスト組織のメンバーが理想としたものは、当時の皇帝アレクサンドル1世自身、そして、その側近中の側近たるアラクチェーエフ伯爵の理想とするところとあまり変わらなかった。このことは、もちろん、デカブリスト叛乱が成功した暁に実現されるべき新しい社会についても言えた。その例外となるのは、ペステリのルスカヤ・プラウダであるが、ルスカヤ・プラウダが南方結社のいわば正典となったのが、デカブリスト中最大最強の軍閥オルロフが運動から脱落した後だということを忘れてはならない。かりにデカブリスト叛乱が1825年以降も摘発されなかったとしたならば、あのような過激な主張がいつまでも組織の正典とされていたかどうかは難しい。

当時の貴族社会の常識とデカブリストとの大きな意見の不一致は一つしか見当たらない。それは軍の統帥権も問題である。これはデカブリストと当時の軍首脳部をわけたもっとも大きな問題である。キセリョフやザクレフスキーのような軍改革派の重鎮は、オルロフのように改革者が軍を私することは決して認めようとはしなかった。おそらく、デカブリスト運動と他の改革派との最大の相違点は、改革のために軍を私することは許されるか許されないかという一点にしぼられる。デカブリストが軍事革命の一つに数えられるゆえんはこれである。

このデカブリスト運動に対するフランス思想の影響が極めて強かったことは以前から主張されているが、パルサモフの言うように、これは三つの次元を区別すべきである。即ち、第一に、革命前からのフランス思想の影響、第二に、フランス人亡命聖職者による教育、第三にフランス王政復古期の自由主義思想である。この三つの区分は、オルロフに関してもはっきり見て取ることができる。

以上

注

（1）E. B. Тарле, Военная революция, *Сочнения*, т. 5, Москва, 1958.

（2）田中陽兒・倉持俊一・和田春樹（編）『世界歴史体系　ロシア史２－18～19世紀－』山川出版 1994年

（3）田中陽兒他（編）『世界歴史体系　ロシア史２』112、134、139、140頁

（4）田中陽兒他（編）『世界歴史体系　ロシア史２』140-141頁

（5）B. C. *Парсамов, Декабристы и Франции,* Москва, 2010, стр. 78.その理由は、ロシア皇帝アレクサンドル１世が、一方で民族解放運動に、他方で農民改革に肩入れしているからであった。すなわち、この時期に皇帝がポーランド国家を再建し、さらに、ウクライナとベラルーシの一部をこれに付属させるつもりでいる一方で、「全皇族を連れて、ワルシャワに赴き、そこで、農奴と農民の自由を宣言する」つもりでいるという風説が流れたことであった。C. B. Мироненко, *Самодержавие и реформы : политическая борьба в России в начале XIX в.,* Москва, 1989, стр. 85-92.

（6）ニコライ一世朝の国有財産大臣となって国有領地の改革や領地台帳の改革を実施したペ・デ・キセリョフは「ペステリの『ルスカヤ・プラウダ』を部分的に知っており、若い部下たちの主張の多くに同意していた」。H. M. Дружинин, *Государственные крестьян и реформа П. Д. Киселева,* т.1, Москва – Ленинград, 1946, стр.267.

（7）ただし、おそらく、改革を行うための方法論において、特に軍事クーデターという方法の可否が、デカブリストとそうでない人々とを分けたのではないかと思われる。この点はのちに触れる。

（8）M. B. Нечкина, *Движение декабристов*, т. 1-2, Москва, 1975. т. 1, стр.6,7-8.

(9) M. B. Нечкина, *Движение декабристов*, т. I, стр.9-10.

(10) M. B. Нечкина, *Движение декабристов*, т. I, стр. 15-17.

(11) この本は1840年代末にはすでに発行されているが、宮廷内部に配布されたにとどまり、一般に流布するようになったのは1857年発行の第三版からである。M. B. Нечкина, *Движение декабристов*, т. 1, стр. 430.

(12) M. B. Нечкина, *Движение декабристов*, т. I, стр. 11, 15.

(13) M. B. Нечкина, *Движение декабристов*, т. I, стр. 17.

(14) M. B. Нечкина, *Движение декабристов*, т. I, стр. 30-31.

(15) M. B. Нечкина, *Движение декабристов*, т. I, стр. 29-30.

(16) M. B. Нечкина, *Движение декабристов*, т. 1, стр. 24-27, 36; 土肥恒之『岐路に立つ歴史家たち』山川出版、2000年、136-138頁

(17) M. B. Нечкина, *Движение декабристов*, т. I, стр. 24.

(18) Abbott Gleason, The Great Reforms and the Historians Since Stalin, Ben Eklof, John Bushnell, and Larissa Zakharova, *Russia's Great Reforms, 1855-1881*, Bloomington and Indianapolis, 1994, pp. 7-11.

(19) A. H. Сахаров, Александр I и Аракчеев, *Отечественная история*, 1998, №. 4, стр.24.

(20) 田中陽兒他（編）『世界歴史体系　ロシア史２』134頁

(21) A. H. Сахаров, Александр I и Аракчеев, стр. 33.

(22) M. A. Давыдов, *Оппозиция Его Величества, Москва*, 1994, стр. 21.

(23) ナポレオン没落後、アレクサンドル１世は勝利を記念する宣言文の文案を国事尚書（Государственный секретарь）のア・エス・シシコフ提督に起草させた。提督はこの文案の中に、農奴制と領主と農民との間の家父長的な関係を賛美する言葉を入れた。皇帝はこの文案を一読するや、真っ赤になり、「こんな良心に反するものに署名なんぞできるか！」と書類を押しのけ、文案の中の「相互の利益に基づいた」という一節を線で消した。この間、アラクチェーエフはずっと皇帝の側に控えていた。提督とアラクチェーエフが一緒に皇帝の御前から下がった時、提督はいかに自分が正しく、そして皇帝が自分と文案とを誤解しているのかについて述べ始めた。この時、アラクチェーエフは……全く無反応であった。C. B. Мироненко, *Самодержавие и реформы*, стр. 63-65.

(24) C. B. Мироненко, *Самодержавие и реформы*, стр. 99-106; A. H. Сахаров, Александр I и Аракчеев, стр.35.

(25) サハロフによれば「アラクチェーエフはアレクサンドルが自分以外の誰かを寵愛するのではないかとひどく心配して、時を得たものの個人的な敵となった」。A. H. Сахаров, Александр I и Аракчеев, стр.33.この点で特にアラクチェーエフが警戒したのはキセリョフであった。A. П. Заблоцкий-Десятовский, *Граф П. Д. Киселев и его время*, т. I-IV, СПб, 1882, т. I, стр.188-189.

(26) A. H. Сахаров, Александр I и Аракчеев, стр.33.

(27) A. H. Сахаров, Александр I и Аракчеев, стр.37.

(28) M. A. Давыдов, *Оппозиция Его Величества*, стр.11-12.

(29) A. Ю. Коваленко, О роли военного министерства в системе управления русской армией в первой четверти XIX в., *Вестник Московского Университета*. серия 8, история. 2002, №2, 52-53.

(30) M. B. Нечкина, *Движение декабристов*, т. I, стр. 48.

(31) B. C. Парсамов, *Декабристы и Франции*, стр.24.

(32) Л. Я. Павлова, *Декабрист М. Ф. Орлов*, стр.54, 71, 108.ただし、オルロフがデカブリスト秘密結社に加入したのは、1818年８月から９月にかけての時期である。Л. Я. Павлова, *Декабрист М. Ф. Орлов*, стр.59.それ以前からオルロフは陰謀を展開してはいるが、それはデカブリスト結社の一員としてではなく、「ロシア騎士団」の一員としてである。

(33) A. B. Семенова, Южные декабртсты и П. Д. Киселев, *Исторические записки*, т. 96, 1975. стр. 133.

(34) Л. Я. Павлова, *Декабрист М. Ф. Орлов,* стр.28-33, 41-43; В. С. Парсамов, *Декабристы и Франции*, стр. 61.

(35) В. С. Парсамов, *Декабристы и Франции*, стр. 270.

(36) В. С. Парсамов, *Декабристы и Франции*, стр. 46-53.

(37) М. А. Давыдов, *Оппозиция Его Величества*, 1994, стр. 4.

(38) すでに見たように、実際には、この暗殺計画の目的は、皇帝が実施しようとしていた改革の阻止であった。C. В. Мироненко, *Самодержавие и реформы*, стр. 85-92.

(39) С. С. Ланда, *Дух революционных преобразований*, Москва, 1975.

(40) С. В. Мироненко, *Самодержавие и реформы.*

(41) Ю. М. Лотман, *Беседы о русской культуре*, СПб., 1994. 邦訳 ユーリー・ミハイロヴィチ・ロートマン（桑野隆、望月哲男、渡辺雅司訳）『ロシア貴族』筑摩書房、1997年

(42) М. А. Давыдов, *Оппозиция Его Величества.*

(43) 例えば、エム・エム・シチェルバートフはそのような貴族主義的反対派の一員とみなせるが、その主張は非常に多くの点でデカブリストと重なる。加藤史朗「十八世紀ロシア貴族の夢—シチェルバートフの『オフィール国への旅』をめぐって—」早稲田大学社会科学研究所（ソ連東欧部会）研究シリーズ29『ロシア・東欧の歴史と文化』1991年

(44) В. С. Парсамов, *Декабристы и Франции*, стр. 64, 88-128.

(45) С. В. Мироненко, *Самодержавие и реформы*, стр. 63-65, 99-106; А. Н. Сахаров, Александр I и Аракчеев, стр.31,35.

(46) А. Н. Сахаров, Александр I и Аракчеев, стр.31.

(47) О. В. Орлик, *Передовая Россия и революционная Франция*, Москва, 1973, стр. 26.

(48) 例えば、次のものがある。Т. В. Андреева, *Тайные общества в России в первой трети XIX в.: Правительственная политика и общественное мнение*, СПб,. 2009.

(49) Anatole. Mazour, *The First Russian Revolution: 1825*, Stanford, 1937.邦訳 A. G. マズーア（武藤潔、山内正樹訳）『デカブリストの反乱—ロシア革命の序曲』光和堂、1983年

(50) М. В. Нечкина, *Движение декабристов*, т. I, стр. 42.

(51) 外川継男 書評「M. B. ネチキナ『デカブリスト運動』M. B. Нечкина, Движение декабристов. Изд. АН СССР. Москва, 1955.」『スラヴ研究』第３号　1959年；池庄司敬信「デカブリストの思想と行動－1－」『法学新報』（中央大学法学会）［編］第67巻第２号　1960年；西田幸子「デカブリストと《統一スラブ結社》」『ロシア史研究』第５巻第１号　1964年；藤本和貴夫「農民運動、兵士の運動とデカブリスト運動」『ロシア・東欧研究』（大阪外国語大学）第５号　1966年；荒武 鉄郎「デカブリストの民族観」『西洋史学』第88巻　1972年；河原祐馬「И.Д.ヤクーシキンとデカブリスト運動——「啓蒙」問題を中心として（1・2)」『法学論叢』第127巻３・４号　1990年；秋元春朝「ロシア啓蒙運動史序説：デカブリスト（１・２・３)」『神戸大学発達科学部研究紀要』第３・４・５巻　第２号　1996、1997、1998年

(52) Л. Я. Павлова, *Декабрист М. Ф. Орлов*, Москва, 1964, стр.5-6.

(53) ロートマン『ロシア貴族』394-395、397頁

(54) В. С. Парсамов, *Декабристы и Франции*, стр. 58.

(55) В. С. Парсамов, *Декабристы и Франции*, стр. 242.

(56) Л. Я. Павлова, *Декабрист М. Ф. Орлов*, стр.13.

(57) Л. Я. Павлова, *Декабрист М. Ф. Орлов*, стр.13-15.

(58) Л. Я. Павлова, *Декабрист М. Ф. Орлов,* стр.15-16.

(59) Л. Я. Павлова, *Декабрист М. Ф. Орлов*, стр.18-19: В. С. Парсамов, *Декабристы и Франции*, стр.243.

(60) Л. Я. Павлова, *Декабрист М. Ф. Орлов*, стр.27-28, 35-36.

(61) Nikolay Turgenev, *La Russie et les Russes*, Paris, 1847.（邦訳　エヌ・イ・ツルゲーネフ（山本俊朗訳）『ロ

シヤおよびロシヤ人』広文堂、1962年)

(62) А. П. Заблоцкий-Десятовский, *Граф П. Д. Киселев и его время*, т.I, стр.42-43, 130; С. В. Мироненко, *Самодержавие и реформы*, стр. 126.

(63) Л. Я. Павлова, *Декабрист М. Ф. Орлов*, стр.40.

(64) Л. Я. Павлова, *Декабрист М. Ф. Орлов*, стр.30-32.パヴロヴァは農奴解放も予定されていたと書いているが、パルサモフはこれを否定している。В. С. Парсамов, *Декабристы и Франции*, стр. 61.

(65) Л. Я. Павлова, *Декабрист М. Ф. Орлов*, стр.36, 44, 52.

(66) Л. Я. Павлова, *Декабрист М. Ф. Орлов*, стр.46-48.

(67) Л. Я. Павлова, *Декабрист М. Ф. Орлов*, стр.52.

(68) Л. Я. Павлова, *Декабрист М. Ф. Орлов*, стр.64, 67.

(69) Л. Я. Павлова, *Декабрист М. Ф. Орлов*, стр.68.

(70) Л. Я. Павлова, *Декабрист М. Ф. Орлов*, стр.68.

(71) А. В. Семенова, Южные декабристы и П. Д. Киселев, стр. 133.

(72) Д. А. Скалон (гл. ред.), *Столетие военного министерства 1802-1902*: т. 4, главный штаб: исторический очерк. организация, расквартирование и передвижение войск. вып. 1 (период 1801-1805.), СПб., 1902, стр. 13-14.

(73) Армия, 2-я 1814-1829, *Приказы 2-й Армии за 1817-1830 гг.,* М. Тульчин и др. 1817－1830. Приказы по армии Глав. квар. М. Тульчин. – Октября 22 дня 1820 года №. 104.

(74) М. А. Давыдов, *Оппозиция Его Величества*, стр. 68.

(75) Л. Я. Павлова, *Декабрист М. Ф. Орлов*, стр.72.

(76) А. П. Заблоцкий-Десятовский, *Граф П. Д. Киселев и его время*, т. I, стр.85, 160; А. В. Семенова, Южные декабртсты и П. Д. Киселев, стр. 141.

(77) Л. Я. Павлова, *Декабрист М. Ф. Орлов*, стр.81.

(78) Л. Я. Павлова, *Декабрист М. Ф. Орлов*, стр.86.

(79) Л. Я. Павлова, *Декабрист М. Ф. Орлов*, стр.86.

(80) Л. Я. Павлова, *Декабрист М. Ф. Орлов*, стр.89-70.

(81) Л. Я. Павлова, *Декабрист М. Ф. Орлов*, стр.71, 88, 91, 92-93.なお、プーシチンが三つある旅団のうちのどの旅団の指揮官だったのかは不明である。

(82) Л. Я. Павлова, *Декабрист М. Ф. Орлов*, стр.100, 102-103, 105.

(83) パヴロヴァは、「サバネーエフが、自分の責任になることを恐れて、第16師団内に秘密結社が存在することを疑いつつも、ラエフスキーとオルロフの捜査、そして秘密結社の摘発を行わなかった」と述べている。Л. Я. Павлова, *Декабрист М. Ф. Орлов*, стр.106.しかし、それまでのサバネーエフの言動からすると、彼が免官を一向に恐れていなかったことは明白であり、これはむしろ、オルロフよりもはるかに正統的な軍人である彼が、軍の私兵化を許せなかったためであろう。

(84) Л. Я. Павлова, *Декабрист М. Ф. Орлов*, стр. 108, 110.

(85) В. С. Парсамов, *Декабристы и Франции*, стр.9.

(86) В. С. Парсамов, *Декабристы и Франции*, стр.63.

(87) ペステリの主張の中にはロシアの首都を北ロシアに移すこと、全ての民族をロシア人に統合すること、ポーランドをロシアの事実上の従属国家にしてしまうことなどが含まれていた。В. С. Парсамов, *Декабристы и Франции*, стр.63-64, 79-84.

(88) В. С. Парсамов, *Декабристы и Франции,* стр.11-12, 360.

(89) В. С. Парсамов, *Декабристы и Франции,* стр.36-40.

(90) В. С. Парсамов, *Декабристы и Франции*, стр.47-48, 50.

(91) В. С. Парсамов, *Декабристы и Франции,* стр.54.

(92) В. С. Парсамов, *Декабристы и Франции*, стр. 237-272.

(93) В. С. Парсамов, *Декабристы и Франции*, стр. 239.

(94) В. С. Парсамов, *Декабристы и Франции*, стр. 244.

(95) В. С. Парсамов, *Декабристы и Франции*, стр. 245.

(96) В. С. Парсамов, *Декабристы и Франции*, стр. 247-248.

(97) В. С. Парсамов, *Декабристы и Франции*, стр. 258-261, 265-266.

(98) アレクサンドル１世は、ナポレオン没落後のフランスの支配者として、ナポレオンの最初の皇后であるジョセフィーヌの連れ子であるウジェーヌ・ボーアルネ、幼弱のナポレオン二世、スウェーデン王太子ベルナドット、オルレアン公フィリップ・エガリテの息子のルイ・フィリップなどを考えたが、ナポレオン本人とルイ18世の復位だけは絶対に認めようとしなかった。それよりは共和国のほうがまだましだと考えていた。タレイランの頑固な説得により、ようやくアレクサンドル皇帝はブルボン家の復帰を不承不承許した。В. С. Парсамов, *Декабристы и Франции*, стр. 261-263.

(99) В. С. Парсамов, *Декабристы и Франции*, стр. 266.ただし、この神秘主義は、アンシャン・レジームへの復帰を望むものではないことに注意されたい。

(100) В. С. Парсамов, *Декабристы и Франции*, стр. 266.

(101) В. С. Парсамов, *Декабристы и Франции*, стр. 266, 267-268, 270.